

## 井上文雄著述目録稿

鈴木 亮

徳川時代後期の国学者歌人井上文雄（寛政十二年～明治四年）の著述は、『補訂版国書総目録』の記載に従へば、四十六点を数へることが出来る。本稿に於ては、『国書総目録』の記述を中心として、また、未著録の著述をも含み、文雄の著した作品の解題を述べることに、する。書名の順は、現代仮名遣ひ五十音順とし、活字翻刻のなされてゐるものは【翻刻】、参考すべき文献がある場合は【参考】として末尾に略記した。

なほ、本文「一」は文雄在世中の作品、「二」は後人の編輯にかゝる作品（但し、板本と同内容のものを除く）、「三」は『国書総目録』に於て井上文雄の著作とされるが、実際は他者の著した作品である。

## 一

1、伊勢の家つと 三編三冊 刊〔歌学〕

初編、安政六年（一八五九）刊。文雄自序、竹川政恕・藤尾景秀

の序文あり。二編、文久二年（一八六二）刊。藤尾景秀・横山由清序文、佐々木弘綱跋文。この初・二編は文雄が、故郷伊勢へ帰る門人佐々木弘綱への家づと（土産）として書き与へたものである。三編は元治元年（一八六四）刊。川喜田政明序文、佐々木弘綱跋文。「調鶴異見」ともいふ。三編は政明への家づととして与へたもの。二卷一冊本（写本）が静嘉堂文庫に伝はる。初編では、本居宣長『玉あられ』を「初学の人のかならず見るべき書なり」として挙げ、その言説をふまへて歌語の用法を説く。萩原広道『さよしぐれ』に対する反論も見られる。二・三編は自説をより多く述べる。『国書総目録』『日本古典文学大辞典』には、明治二十二年に活字本が出版されたとあるが、不明。なほ、年次は未詳ながら「我あらはせる伊勢の家づとといふ書、かしこくも台覧をへぬるよし伝へうけ給はりて」（『調鶴集』八七一詞書）と、人物の特定は出来ないが、三公、公方、皇族といった身分の高い方が披見なさつた次第が窺へる。

【翻刻】宮脇義臣「伊勢の家づと評（一）」（『十二』）（『あさみどり』第八年一月之巻～十一月之巻、大正三年一月～十一月）

2、いちのとよみ 一冊 写〔歌合〕

別称「十番歌合」。天保十五年（一八四四）成立。この年の一月五日、二月五日、三月五日、四月五日、五月五日、六月五日、七月五日（十二番）、八月五日（十二番）、九月五日、十月八日、十一月五日、十二月五日（八番）に行はれた十番歌合をまとめたもの。序文は「歌堂主人」即ち文雄が記してゐる。作者は文雄・井岡すむ子・真清（岡部？）・加藤千浪・岸本弓槻・瀬戸久敬・山田常典・岡見清熙・はた子・正樹（末松？）の十名。判は詠者以外の者が行ひ、判詞もその全員で記してゐるもの、どの判詞が誰のものかが、氏名の記述がない為特定出来ない。東京大学総合図書館蔵。

### 3、井上文雄詠草 一冊 写〔歌集〕

自筆本。罫紙二丁に恋歌十二首、最終歌の次に「井上文雄」の署名。その後別紙（四丁、最終丁は白紙）にて恋歌十五首、雑歌七首（こちらも最終歌のあとに署名）記されたものが合綴されてゐる。成立年未詳。静嘉堂文庫蔵。

### 4、井上文雄判五十番歌合 一卷 写〔歌合〕

「湖上冬月・水鳥曙・雪・炭竈・埋火・冬忍恋の諸題にて、安井静枝・堀野義礼等十人歌合。一本慶大図書館にあり」（福井久蔵『大日本歌書綜覧』）とあるが伝本未詳。『国書総目録』にも記載なし。

### 5、歌合 三十九冊 写〔歌合〕

嘉永五年（一八五二）から慶応三年（一八六七）にかけて行はれた、柳河藩主立花鑑寛の催した歌合に文雄が判詞を記したのもの。一（嘉永五年）～四（嘉永六年）五十五番。五（嘉永七年）四十五番。

六（嘉永七年）～八（安政三年）五十五番。九（安政三年）五十四番。十（安政三年）～二十二（文久二年）五十五番。二十三（文久三年）～三十七（慶応三年）三十五番。三十八、三十九（慶応三年）三十五番。出詠者は、藩主鑑寛を中心として、常顕・惟充・政美・基徳等といった家臣団。なほ、三十八、三十九には出詠者の記載がない。柳川古文書館寄託。

【参考】久保田啓一「幕末期柳河藩の歌合」〔『雅俗』三号、平成八年一月〕

### 6、歌合 四冊 写〔歌合〕

柳河藩主立花鑑寛の周辺で実施された、井上文雄判の歌合。「二十四番冬歌合」「三十番春歌合」「三十六番夏歌合」「三十六番歌合」の四種。出詠者は、典胤・まき子・保教・幾瀬子・幸成・つね子・忠恕・政美・花子・汀子等。柳川古文書館寄託。

【参考】久保田啓一「幕末期柳河藩の歌合」〔『雅俗』三号、平成八年一月〕

### 7、延齡話 一冊 刊〔随筆〕

文久四年（一八六四）刊。序跋なし。一種の随筆的教訓書。俗を離れ大和心を持って身を保つこと、歌の徳の有難さを説き、畢竟よはひを延ばすものと説く。無窮会図書館平沼文庫蔵（『道のさきはひ』『諷歌新聞』と合冊）。

### 8、老のくりごと 一冊 刊〔歌集〕

元治元年（一八六四）刊。山岡久敬の序。全首第五句が「老いにけるかな」で終る六十五首を収録。成立は、文雄六十五歳の元治元

年である。明治二年（一八六九）、七十歳の折に同形式の五首を加へ、七十首として再板した。卷末「七十翁 井上文雄」の「七十翁」の部分が埋め木となつてゐる。収録歌全てが連作の形をとつており、その独自性は顕著である。

【翻刻】拙稿「井上文雄『老のくりごと』——翻刻と解題——」（『東洋文化』復刊九十七号、平成十八年九月）

9、大井川行幸和歌考証 一冊 刊（註釈）

文政三年（一八二〇）江戸英平吉刊。岸本由豆腐序文、文雄自序、伊庭至清跋文。「提要」に「田安の殿人 井上文雄」と記す。由豆腐は序文で「かゝるわかう人のわざにては似つかはしからず」と文雄を称揚している。「考証」という書名の付け方にも由豆腐の影響が窺へる。『大井川行幸和歌』を註解し考証を加へた唯一の著。文雄の処女作。

【翻刻】室松岩雄編『国文註釈全書 竹取物語抄補注・徒然草野槌・十六夜日記残月抄補注・世諺問答考證・大井川行幸和歌考證』（明治四十二年、國學院大學出版部）

10、思草考 一冊 写（歌学）

「集中（萬葉）の思草につきて、仙覚抄等の諸註、八代集の例歌等を引きて考証せるもの。『萬笈堂藏』の柱ある野紙に書けり」（佐佐木信綱『竹柏園藏書志』）。天理大学附属天理図書館蔵。虫損甚だしく閲覧制限あり。

11、柯堂詠草 一冊 写（歌集）

板本『調鶴集』とほぼ同内容。門人大野定子が手写したものの。

「大野定子文庫」の印記あり。『調鶴集』にある文章の部はをさめられてゐない。収録歌に関して、『調鶴集』と若干の異同がある。即ち、春一首、夏三首、秋一首、冬二首、恋四首、計十一首が別の歌である。「竹柏園文庫」「天理図書館蔵」の印記あり。成立年未詳。天理大学附属天理図書館蔵。

12、柯堂茶話 一冊 写（考証）

「大宗匠、自を某といふこと、以下百箇条の語につきて、古書を引証し述べたり。文雄は、初め歌堂と号し、後、柯堂と改め書けり。先考（註、弘綱）の書写本」（佐佐木信綱『竹柏園藏書志』）。現存未詳。

13、歌堂初学抄 二卷（国学）

『国学者伝記集成』による。

14、歌堂酔語 二冊 写（随筆）

「歌文に関する考証的随筆なり。柱に放證閣とある界紙に記せり」（佐佐木信綱『竹柏園藏書志』）。天理大学附属天理図書館蔵。虫損甚だしく閲覧制限あり。

15、歌堂随筆 二卷（随筆）

『国学者伝記集成』による。

16、柯堂叢考

『国学者伝記集成』による。

17、柯堂藏書目録 一冊 写（藏書目録）

「井上文雄の藏書書目なり。表紙裏に先考（註、弘綱）の筆にて、「此書籍大半、明治三年の夏、弘綱、翁のもとに居たるほど、我は

譲るべき子もなければとて、書肆に價を定めさせて譲り給へれば、吾が蔵本となれり。かくて翁次の年の冬身まかられき」とあり（佐佐木信綱『竹柏園蔵書志』）。現存未詳。

18、**柯堂枕談** 三卷〔随筆〕

『国学者伝記集成』による。

19、**柯堂文章** 一冊 写〔文集〕

成立年不明。『竹柏園蔵書志』に大野定子の筆とあるも未詳。『調鶴集』『文章』所収の文章は全て収める。そして『調鶴集』には収録されてゐない、「松園の記」「霖はれてあかきころつくれるふみ」「何かしのもとにおくる消息」「蝸庵西記」「緑堂の記」「宇治拾遺にならふよしなしこと」「ある人の乞にまかせて」「ある人にしめす」「栽松辞」「冬夜読書」「長歌を辞する文」の十一編の文章が収められてをり、『調鶴集』に対して広本の関係にあると言へる。「竹柏園文庫」「天理図書館蔵」の蔵書印あり。天理大学附属天理図書館蔵。

20、**歌堂類語** 三冊 写〔語彙〕

序跋なし。成立年未詳。中世の歌文書から語句を抽出して、イロハ順に排列したもの。一、「攻証閣」の罫紙に百一丁。二、「柯堂」の罫紙に七十五丁（後ろ六丁は罫紙にあらず）。三、二十丁。「竹柏園文庫」「天理大学図書館蔵」の蔵書印あり。天理大学附属天理図書館蔵。

21、**歌堂類聚** 三卷二冊（天地人の人歛） 写〔語彙〕

竹取物語・住吉物語・伊勢物語・大和物語より語句を抽出し、イロハ順に分類、排列したもの。序跋なしのため成立年未詳。「攻証

閣」の罫紙を使用。天いそ、地つふ、人歛。「歌堂文庫」「竹柏園文庫」「東京帝国大学図書印」の蔵書印あり。東京大学国語研究室蔵。

22、**仮字一新** 一冊 刊〔語学〕

明治二年四月以降刊。三丁。「上代の仮字は大和の音なり、中世以後は平安朝の音を用ゐて、むめ、むま、と書くべしと、中世の諸書の例を引きてあげつらへり。奥に、「明治二年四月 七十翁文雄識」とあり（佐佐木信綱『竹柏園蔵書志』）。「Cani Book」に拠ると、東京大学大学院人文社会科学系研究科文学部図書室に一本所蔵を確認出来るもの、現存未詳である。なほ、「この人（註、文雄）の「仮字一新」と云ふ本があります。これも仮名は心の儘に書けと云ふのであつて復古の仮名遣を排斥しまして、かへつて定家の方に荷担して居ります」（森鷗外「仮名遣意見」と、『仮字一新』に就ての記事を拾ふことが出来る。

23、**仮字記録** 一冊 写〔語学〕

栄花物語・水鏡・大鏡・増鏡・続世継（今鏡）の五種の本より抽出した語句を五十音順に並べたもの。「柩園」の罫紙を使用。序跋奥書など無いため成立年未詳。「歌堂文庫」「竹柏園文庫」「東京帝国大学図書印」の蔵書印あり。東京大学国語研究室蔵。

24、**菅家影前扇合** 一冊 写〔歌合〕

嘉永五年（一八五二）五月十五日の催しで、作者はきよい子・玄洲・伊能類則・のぶ子・茂谷・政雄・山川真清・遠山長嶺・幸雄・加藤千浪の十名。五番行はれてゐる。歌合の判者は文雄、扇合の判

者は寺山吾鬢がつとめる。蔵書印は「本居文庫」「本居蔵書」の二種。東京大学国文学研究室（本居文庫）蔵。

25、冠註大和物語 三卷三冊 刊〔註釈〕

嘉永六年（一八五三）刊。文雄自序あり。加藤千浪・草野御牧・横山由清・伊能類則の校合を経て刊行される。序文に「おのれ二十歳ばかりのころほひ、此書の注釈せむと思ひ立て、証歌・語例・引書などかつ／＼かいつけぬるに」とあるやうに、二十歳の頃に『大和物語』の註釈をしようと書き付けておいた証歌・語例・引書を補訂して成立したのが本書である。『日本古典文学大辞典』の「冠註大和物語」の項（高橋正治執筆）には、「自序で、作者については、天暦の頃、何人かが書いておいたものに、花山院の寛和・永延の頃の人加筆したもので、一人の手に成ったものではないと述べ、名称については、諸国の話が出て来るので、「日本の物語」の意であるろうといっている。また賀茂真淵が『伊勢物語』の方に価値の上で優位を認めたのに対して、時代の変遷に応じて作品の特色も変るといふ、歴史的な判断を適用し、客観的な態度をとろうとしている点が高く評価される」と記されてゐる。

【翻刻】雨海博洋『大和物語諸注集成』（昭和五十八年、桜楓社）

26、句題集 一冊 写〔歌学〕

「古歌集に見ゆる詞書を、四季恋雜に分ちかけるもの。文雄がその歌に於ける題材を新たならしめむが為めの苦心の俤ばるるもの」（佐佐木信綱『竹柏園蔵書志』）。現存未詳。

27、古今集序考 一冊〔歌学〕

『国学者伝記集成』による。

28、古今集両序論 一冊 写〔歌学〕

「真字仮字両序の作者につきての論なり。先考（弘綱）の書写せる本」（佐佐木信綱『竹柏園蔵書志』）。現存未詳。

29、さきはひ草 二卷二冊 刊〔撰集〕編

慶応二年（一八六六）刊。柯堂社中蔵梓。41『摘英集』の続編。大神（草野）御牧の序、文雄の提要（元治元年）、大野定子の跋文（慶応二年）あり。『摘英集』に採られてゐる歌人のほかに、村上忠順・深見篤慶・村井長史といった三河国の歌人の詠をも収める。なほ、拙稿「さきはひ草」（島津忠夫ほか監修『和歌文学大辞典』平成二十六年、古典ライブラリー）に「元治元年刊」とあるは誤り。

30、三十番歌合 一冊 写〔歌合〕

伊勢の本草学者丹波之翰（修治）を催主として行はれた歌合。蔓延元年（一八六〇）成立。表紙に「萬延元庚申年八月／催主 丹波之翰／井上文雄大人玉判／兼題 春曙」。出詠者は、村井長史・磯部長恒・佐々木弘綱・佐々木鳩子（弘綱母）等。之翰の縁からか大矢知・桑名・石薬師・菰野・神戸・山田といった伊勢の人が多く出詠してゐる（伝未詳）。蔵書印「川北文庫」「丹波氏記」。国文学研究資料館所蔵。

31、四十五番歌合 一冊 写〔歌合〕

扉に「四十五番歌合／題 年中行事 詠史 江戸名所」。上野出身の国学者歌人橋本直香が、文雄と共に判者をつとめる。元治二年（一八六五）成立。年中行事・詠史・江戸名所の各題十五番、計四

十五番を取める。天理大学附属天理図書館所蔵。

32、十八番歌合 一冊 写〔歌合〕

浜松藩主井上正直・津山藩主松平斉民・徳島藩主松平(蜂須賀)

斉裕・福岡藩主黒田慶賛(長知)・高須藩主松平義建・加賀藩主松

平(前田)慶寧他十二名による藩主を中心とした歌合。黒田長知が

「慶賛」と名乗つたのが嘉永元年(一八四八)から明治二年(一八

六九)、出詠者の中で最も早く逝去した松平義建の歿年が文久二年

(一八六二)であることから、嘉永から文久年間に成立したと言へ

るであらう。国文学研究資料館所蔵。

33、十番歌合 一冊 写〔歌合〕

文久二年(一八六二)成立。巻末に「六十三翁文雄陳人」とある

ことから明らかである。出詠者は、大野定子・草野御牧・横山由

清・長尾通広・鈴木和良・長田古文・茂方・鳥津永子・山崎知雄・

松の門三帥子。「歌は横山由清がかき、文雄が判をした十三枚の奉

書全紙を二つ折にした袋綴である」(熊谷武至『続々歌集解題余談

壺』)とその装訂の様子がうかがはれる。「晚夏暁月」の題で五番、

「恋漆」で五番、計十番。熊谷武至所蔵。

【翻刻】熊谷武至「井上文雄文献傍註例その二」(『続々歌集解題余

談壺』昭和四十三年、私家版)

34、詞林葉 十二冊〔漢詩〕

『国学者伝記集成』による。

35、続霊語通 二冊〔語学〕

『国学者伝記集成』にその記述があるのみであるが、題名から推

し量るに上田秋成『霊語通』で言ふ、仮名遣は一定の条理なく、い

づれでも良いとする一種の放任主義の説をよしとする著であらう。

鵬外は文雄の『仮字一新』を読み、「仮名遣は心の儘に書けと云ふ」

内容であつたと記してゐる(『仮名遣意見』)。文雄の仮名遣論は、

復古的なものではなかつた。現存未詳。

36、調鶴集 三卷三冊 刊〔歌集〕

慶応三年(一八六七)江戸岡田屋嘉七刊。文雄の家集。序文は

佐々木弘綱がものしてをり、弘綱の口ぞへにより伊勢津藩主藤堂高

猷の出資で板になつた。文雄自撰。春百三十四首(他人歌二首)、

夏百二十一首、秋百四十九首、冬百四十九首、恋二百三首、雑百八

十三首(他人歌二首、連歌長歌を含む)、文二十三編(調鶴文章)

を収録する。その歌風の特徴として、佐佐木信綱は、「彼(註、文

雄)の家集調鶴集及び同統編によつて見ると、王朝時代の趣味を詠

んだこと、田園の野趣をうたつた歌に秀逸が少くないこと、洒落滑

稽の歌を詠んでゐること、時勢を諷刺した作の多いことなど、幾多

の特長がある。総じて優美なうちに打寛ろいだ趣のあるのが、彼の

歌風の特徴である。」といふ四点を指摘してゐる(『近世和歌史』大

正十二年、博文館)。文雄歿後の明治十七年四月、門人松の門三帥

子の手によつて『井上文雄翁歌集』と改題し、別所平七より再板さ

れる(三帥子跋文が新たに附される)。

【翻刻】続日本歌学全書十一『明治名家家集上巻』(明治三十二年、

博文館)、校註国歌大系二十『明治初期諸家集』(昭和四年、国民図

書)、『新編国歌大観第九卷』(平成三年、角川書店)

【参考】拙稿「井上文雄の田園詠」(『成蹊國文』三十七号、平成十六年三月)

37、調鶴集 一冊 写〔歌集〕

「刊本とは別本なり。表紙に「安政三辰年同四巳年」とあり。表紙の裏に先考(註、弘綱)の手にて、「江戸にありける時、翁の家集うつしと、めて、自筆元本をもらひつるなり」とあり(佐佐木信綱『竹柏園藏書志』)。巻頭「調鶴集 井上文雄先生詠 蘭田守英撰」。文久元年佐々木弘綱序。序中に「井上翁のはやくよりの詠艸を何くれとしとけなくしるしおかれたるを、小川みさ子清う書あらためて調鶴集と名つけつるか、廿卷余もあるか中より、さいつ年おのれ江戸にありける比、こ、かしこをぬき出て一卷写し来つるに、其のち見もし聞もして書と、めつる反古のあまたあるを、こたひ園田守英歌席に携る作例の料にとて、かきくはへてかく小冊にものしつる也けり」とある。見返には、弘綱朱筆にて文雄の辞世が記されてある。藏書印「弘綱藏書」ほか一印。天理大学附属天理図書館蔵

38、調鶴集 一冊 写〔歌集〕

「自筆薄様本。これも刊本とは別本なり。終に「忍の岡に戦争はじまりて兵火天をこがせり」といへる詞書の歌あり(佐佐木信綱『竹柏園藏書志』)。現存未詳。

39、調鶴集 一卷〔撰集〕

「門下の人々の歌を部立して撰めるもの。慶応二年成る。」(福井久藏『大日本歌書総覧』)。現存未詳。

40、調鶴集二編 一冊 写〔歌集〕

「調鶴集にもれたる文雄の歌を集む。先考(註、弘綱)の自筆本なり。維新時に於ける激情の作、入牢の歌等あり(佐佐木信綱『竹柏園藏書志』)とある如く、雑部初めに『諷歌新聞』発刊に拠る、明治元年十一月入牢の歌がある。岩田光子は、本書の編者を園田守英としてゐる(『評伝井上文雄』『学苑』三三七号、昭和四十六年一月)が、その根拠は不明である。天理大学附属天理図書館蔵。

【参考】下村海南「短歌と新聞」(山本三生編『短歌講座第十卷』昭和七年、改造社)

41、摘英集 六卷一冊 刊〔撰集〕編

安政四年(一八五七)江戸岡田屋嘉七刊。自序。内題「摘英和歌集」。文雄門下を中心とした撰集。「附言」に於て文雄は、「歌に人々本性の口つきありといふは、予はじめて心づきたることなり」などといった歌論を述べる。表紙裏に「此集つきくくに年々に上木せられんとす。心ざしあらん人は歌どもおこせ給へ」とあり、毎年出版する予定であつたが実現されず、七年後「さきはひ草」がそれを継ぐ形となつた。出詠者は横山由清・間宮永好・久松祐之・尾高高雅・小川直子(松の門三艸子)・渋谷国安・草野御牧・伊藤祐命・久米八十子・加藤千浪・鬼沢大海・安斎教子・文雄の祖母等であり、文雄が入りした藩侯の侍女の作も多い。

42、道理に違へる詞遣 一冊 写〔語學〕

中島広足の著した仮名遣書に、文雄が註を附したものの。刈谷市中央図書館(村上文庫)に写本が伝はる。

43、名葉字引 一冊 写〔字彙〕

文政七年（一八二四）成立。文雄編輯にかゝる画教順に排列された漢字字書。「杜望主人」の序文あり。全九丁。徳島県立図書館に写本が伝はる。

44、廿一代集類字 三卷二冊（上巻缺） 写（和歌）

成立年未詳。二十一代集より歌ことばを抜き出し、イロハ順に排列したもの。「柗園」の野紙を使用。中巻「自曾字至天字」、下巻「自安字至須字」。「歌堂文庫」「竹柏園文庫」「東京帝国大学図書印」の蔵書印あり。東京大学国語研究室蔵。

45、二十五番歌合 一冊 写（歌合）

二十五番の判詞末に「柯堂」。詠者は、景衡・草野御牧・石橋慈舟（羅窓）他七名。天理大学附属天理図書館蔵。

46、二十四番歌合 一冊 写（歌合）

高松宮家本の新写本。広島大学図書館福井文庫蔵。

47、廿番歌合 一冊 写（歌合）

桜山文庫（茨城県鹿島郡）に写本が伝はる。『詠仏百首』と合一冊。同様のものかは判然としないが、『日本古書通信』（六十七巻二号、平成十四年二月）、秀峰堂（栃木県宇都宮市）の目録に、文雄が判をつとめ、出詠者は盛長・為俊・親堅・和良・祐林等といふ『二十番歌合』が掲載されてゐた。当時、直ぐ様註文したのだが、生憎入手すること叶はず、その後行方を聞かない。

48、二十八番歌合 一冊 写（歌合）

真雪君（松平慶永）・光霽君（蜂須賀齊裕）・観瀾君（立花鑑寛）他二十五名による歌合。作者は藩主を中心とするが、加藤千浪・伊

東祐命・大野定子といった江戸の歌人の名も見える。「海辺松雪」「山家夕」の二題。柳川古文書館寄託。

49、八代集難評

畑銀鷄「書画齋粹」初編（天保三年刊）による。

50、八代集評論 二冊（歌学）

『国学者伝記集成』による。

51、はなあはせ 一冊 写（歌合）

天保十五年（一八四四）成立。文雄が花の判者、村田春野が歌の判者をつとめる。作者は、左方、東野行義・朝田弓槻・末松正樹・加藤千浪・瀬戸久敬、右方、岡見清熙・桜井光枝・所光被・山田常典・森真清。花の判、歌の判どちらかに重きが置かれてゐるといふことはない。国立国会図書館蔵。

52、百番歌合 一冊 写（歌合）

安政四年（一八五七）成立。文雄の判。作者は、松永吉胤・原田正時・僧在阿・釈龍海・桑門了観・石川純孝・三千代女・八千代女・酒井利亮・村上忠順等、尾三の歌人が目立つ。左右二首の歌を先に記し、判詞の部分空けて置き、その後文雄が判を書き加へて成立したと思はれる。刈谷市中央図書館（村上文庫）蔵。

53、百番歌合 一冊 写（歌合）

安政五年（一八五八）成立。松平慶永・蜂須賀齊裕主権による歌合。安政四年冬、齊裕が構想し、慶永が詠歌を集めた（「安政といへる巳の年の冬、阿波の中將の君、こたび百番の歌合を物せんとは思ひた、せ給ふて」慶永序文。同序文には、「貴賤上下の差別なく

大に集め」たとある如く、出詠者は、慶永・斉裕・立花鑑寛といつた藩主から、伊東祐命・加藤千浪・横山由清・佐々木弘綱・草野御牧等、文雄門人まで左右百人を数へる。「山霞」「浦花」の二題。柳川古文書館寄託。福井県立図書館松平文庫にも一本所蔵が確認出来る。

【参考】久保田啓一「幕末期柳河藩の歌合」(『雅俗』三号、平成八年一月)

54、**諷歌新聞** 一冊 刊〔歌集〕

慶応四年(一八六八)四月南伝馬町文雅堂刊。美濃判二つ折、木版、本文五丁、定価一匁。表紙中央に「諷歌新聞 卷第一」。草野御牧の序。「ゆく末のたのみも今はなかりけり君が千代田を人にかられて」(文雄)といった明治新政府を批判し、徳川幕府に同情を寄せる文雄の歌二十首、御牧の歌十首を纏めて「新聞」として発刊したもの。そのために、政府の忌諱に触れ、文雄・御牧の両名は糺問局に拘禁されるに至る。跋文によると、第二号以下出版の予定はあつたが、果たされることはなかつた。「諷歌新聞」を明治筆禍史の嚆矢とするのは、その刊行年月を以てするためであり、逮捕糺問の年月から見ると、『江湖新聞』十六号(慶応四年五月五日発行)の福地源一郎(同年五月十八日逮捕)となる。後年、宮武外骨が自著『すきなみち』(昭和二年、半狂堂)の附録として『諷歌新聞』を現物の通りに複製した。

【翻刻】熊谷武至「諷歌新聞」(『統歌集解題余談』昭和十八年、私家版)、小泉琴三編『現代短歌大系第一卷』(昭和二十七年、河出書房)

【参考】下村海南「短歌と新聞」(山本三生編『短歌講座第十卷』昭和七年、改造社)

55、**文雄翁家集**〔歌集〕

『国学者伝記集成』による。「井上文雄翁家集」(明治十七年、小川三草)のことか。「井上文雄翁家集」は、刊本『調鶴集』と同内容。

56、**道のさきはひ** 一冊 刊〔歌学〕

文久四年(一八六四)成立。刊年未詳。大神(草野)御牧序。卷末に「ことだまのさきはふ道にいる人は神もうれしと見そなはすらむ」といふ文雄の歌があり、書名の由来となつてゐる。賀茂真淵に対する批判、「気概」の強調、歌の政教的価値などに就て述べられてゐる。

【参考】拙稿「井上文雄著『道のさきはひ』―翻刻と解題―」(『成蹊國文』三十八号、平成十八年三月)

57、**大和物語新註** 五卷 (註釈)

『国学者伝記集成』による。

58、**四番歌合** 一卷 写〔歌合〕

「作者八人。後藤氏の催。判者井上文雄」(福井久蔵『大日本歌書綜覧』)。「後藤氏」とは詳らかならず。現存未詳。

59、**由清十五番自歌合** 一冊 写〔歌合〕

横山由清の自歌合に文雄が判を加へたもの。一丁表に「十五番自歌合／横山由清／題／左花／右月」。蔵書印「竹柏園文庫」。天理大学附属天理図書館蔵。

60、**落書風今様歌** 一葉 (今様)

「終に、「建武年間の落書にならふ今様うた 六十九翁文雄戯述」とあり。中に、「三部習合切ぬき学問、いける眼はありながら、物の沿革わきまへず、歌よむ業は月花の、遊びの道といひけちて」、「今や大政復古の秋、よるづ昔の糧原に、習はせ給ふ此時に」などの句ありて、「諷調倒語のさきはひ」に就きて述べたり」（佐佐木信綱『竹柏園藏書志』）。現存未詳。

61、和字辨 一冊〔国学〕

『国学者伝記集成』による。

62、和字法帖 一冊〔書道〕

『国学者伝記集成』による。

二

63、短冊井上文雄歌集 一冊〔歌集〕

築瀬一雄編。昭和三十二年十一月、湯浅四郎刊。名古屋の郷土史研究家湯浅四郎所蔵にかゝる文雄短冊三百六十六枚を築瀬が翻刻した謄写版。「附載」には、文雄の色紙、門人の短冊などの翻刻も収める。文雄の歌は計三百六十九首、うち『調鶴集』との重複歌は十五首のみ。湯浅は、文雄の短冊を作州津山の旧藩主松平家より一括入手したとのこと、伝来も確かなものである。

64、調鶴集抄 一冊〔歌集〕

森田義郎編。明治四十二年一月、歌学雑誌『国歌』三十号の附録として出版されたもの。板本『調鶴集』（36）、写本『調鶴集』（37）等より百九十五首を抄出してゐる。森田は、文雄に私淑して

をり、「予文雄の為人を愛し、其の歌を好む。今ここに数百首を抄出して遺業の湮滅を防がむとするは、その啻に之を好愛するがためのみにあらず。実に彼が如き作家は数百年にして遇々見るべきを思へばなり。」と解題にて絶讃してゐる。

【翻刻】拙稿「井上文雄『調鶴集抄』―翻刻と解題―」（成蹊人文研究）二十三号、平成二十七年三月）

三

(1)、元真集 写〔歌集〕

『国書総目録』に拠ると、国立国会図書館に写本が伝はり、屋代弘賢の『輪池叢書外集』十二に収められてゐるとあるが、本書は、平安朝の歌人藤原元真の家集『元真集』のことである。

(2)、古今韻括開合図 一冊 写〔音韻〕

内閣文庫に写本が伝はる（『国書総目録』）が、本書は木村兼霞堂の写した文雄（モンノウ或いはブンノウ）の著作。文雄は宝暦十三年（一七六三）に六十四歳で歿した、浄土宗学僧、京都了蓮寺の僧。音韻に関する著作が数多くあり、本書もその一つ。

(3)、賀五十齡歌 一冊 刊〔歌集〕

嘉永六年（一八五三）刊。群馬の歌人、関橋守の五十賀を祝つた歌集。文雄は跋文を記すのみ。出詠者は足代弘訓・荒木田久守等、伊勢の神職が多い。

(4)、集古織文 一冊 刊〔紋章〕

別称「古紋図譜」。有斐亭金蟬の著作。文雄は序文を記してゐる。

刊年未詳。

(5)、美与之野帖 一冊 刊〔歌集〕

津藩主藤堂高猷の家集。序なし。跋文は文雄・加藤千浪がものしてゐる。一面に二首といふ贅沢な構成。本書を文雄の著作としてゐるのは『国書総目録』に限らず、足立巻一『やちまた』（昭和四十九年、河出書房新社）に登場する古書肆、中田政吉書房の目録『伊勢たより 古本販売目録と史料』（六十七号、昭和十六年二月）にも、「美よし野帖 井上文雄大本小虫あり 一冊 一、〇〇」といふ記載がある。

○

以上、六十四点（歿後の作品も含む）の著作がある訳であるが、その多くは写本でしか伝はつてをらず、活字化もされてゐないといふ悲しい現実がある。六十四点のうち半数以上を和歌関係の著作が占めてをり、また数多の歌合の判者をつとめるなど、国学者といふよりも寧ろ歌人として自他共に認めてゐたのではあるまいか。「江戸派の殿将として幕末の歌壇に光を放つた歌人」とは、佐佐木信綱の文雄評である（『近世和歌史』大正十二年、博文館）。

本稿に於て『竹柏園蔵書志』の記述が目立つのは、文雄が生前（明治三年五月）門人である佐々木弘綱にその蔵書を託した為である<sup>2</sup>。弘綱の息信綱は、「吾家、翁の全集を蔵するをもて、更に撰びて世に出す時あるべし。」と、文雄の全集を所蔵してをり、出版の意志があると語つた（『続日本歌学全書第十一編』解題）。そして、

子規門下の歌人森田義郎は、この文雄の「全集」を披見し、矢張り世に問はうとしたが、病のため頓挫してしまつた。その次第を以下の如く記してゐる（若干誤字の訂正を施した）。

彼が全集は佐々木信綱大人深く秘めて人に見せず、その如何に卓抜の作あるかは、吾人の久しく知らむとせし処、昨夏、予の病むや佐々木氏特に予に貸与せらる、予は褥中幾度か巻を掩うて泣きぬ。その知己の韻になきぬ。佐々木氏の恩に泣きぬ。

ああ、文雄死して三十余年、その体は將に腐れなむとすると、一人の文雄の遺志を継ぐものなく、一人その愛妾の末路を訪ふものなし。

予慨然としてこれが全集を編み以て大に之を助けむとせしも、病軀の故を以て果さず、民友社印刷部長渡邊為蔵氏予が志を憫み、印刷の事に当らる。今その一部なる歌集中の秀逸と思はる限りを公にして世の志士仁人が講誦を待ち、更にその第二編として彼が門人の歌集を編次せむとす。

しかし、弘綱・信綱二代にわたる「竹柏園文庫」は、今日、完全な形で伝へられてはをらず、森田の出版計画も叶はぬま、である。「現存未詳」とされる文雄の著作も何処に埋れてしまつてゐるのか皆目見当がつかない。梓に上つた著作十一点のうち、『仮字一新』は行方が知れず、『延齡話』も一本が伝はるのみといふのも、文雄が我が国文学史に正当な位置づけをされてゐない一つの要因であらう。いつの日か、これら現存未詳の著述があらはれるのを期待し、筆を擱くこと、する。

注1 由豆流の著した註釈書としては、『鳴門中将物語考証』（文化十四年序刊）、『土佐日記考証』（文政二年刊）、『萬葉集攷証』（文政十一年成）などが挙げられる。

2 文雄門下の佐々木弘綱は、文雄の蔵書に関して「此書籍大半、明治三年の夏、弘綱、翁のもとに居たるほど、我は譲るべき子もなければとて書肆に價を定めさせて譲り給へれば、吾が蔵本となれり。かくて翁次の年の冬身まかられき」と『柯堂蔵書目録』（現存未詳）の表紙裏に記した（『竹柏園蔵書志』）とされてゐる。弘綱は明治三年五月、東京を訪うてをり（高倉一紀「佐々木弘綱年譜（上）」平成十年、皇學館大學神道研究所）、その際、文雄より蔵書を贈られたのであらう。

3 森田義郎「忘れられし井上文雄」（『日本人』四百三十七号、明治三十九年六月。文中「今その一部なる歌集中の秀逸と思はるる限りを公にして」とあるは、本稿「二」63『調鶴集抄』のこと。

〔参考文献等〕

福井久蔵『大日本歌書綜覧』（大正十五年）昭和三年、不二書房

佐佐木信綱『竹柏園蔵書志』（昭和十四年、巖松堂書店）

森末義彰・市古貞次・堤精二『国書総目録』（昭和三十八年）昭和五十一年、岩波書店

同右補訂版（平成元年）平成三年、岩波書店

国文学研究資料館編『古典籍総合目録』（平成二年、岩波書店）

国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」（<http://basel.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html>）

国立情報学研究所「Cinii Books 大学図書館の本をさがす」（<http://cinii.ac.jp/books/>）

〔附記〕 本稿を成すに当り、様々な方より御教示、御高配を頂いた。記して感謝申し上げる次第である。

（すずき・りょう 東京都立足立工業高等学校教諭）